

News Letter

日本精神障害者リハビリテーション学会



ともに創る、ともに暮らす

- 01 第32回札幌大会 開催報告
 - » 研修セミナー報告
- 02 IPPO 賞受賞者紹介
- 03 第33回京都大会のご案内
- 04 理事自己紹介 Part 2
- 05 編集後記

2026年2月 発行

VOL. 67



雪の弘前城 photo by 大原

【事務局】 〒060-8556 北海道札幌市中央区南1条西17丁目
札幌医科大学 保健医療学部 作業療法学第二講座 池田研究室
<https://japr.jp> Mail : japr.jimukyoku@gmail.com

01 / 第32回北海道大会 開催報告

大会長 池田 望（札幌医科大学 教授）

令和7年10月25日（土）～26日（日）を会期とした日本精神障害者リハビリテーション学会第32回札幌大会を無事終えることができました。参加者の内訳は、会員206名、一般の非会員237名、当事者・家族・学生185名、合計で628名となりました。札幌医科大学を会場に使用しましたが、当初は450名程度を見積もっておりましたので、参加された方は少し手狭に感じたかもしれません。予想を上回る多くのご参加をいただき、広報を担っていただいた委員のご尽力と、何よりもご参加いただいた皆様に深く感謝を申し上げます。

今大会では口演発表45演題、ポスター発表38演題、自主企画24演題の発表の他、大会長企画、特別講演、大会企画シンポジウム、学会企画シンポジウム、市民公開トークイベントが各1題、教育講演が3題、研修セミナーが4題、他にSST普及協会と心理教育・家族教室ネットワークのシンポジウムも開催されました。大会長企画では北海道で開催された前回大会（第18回浦河大会）の大会長らを迎え、浦河の実践を基に過去・現在、そして未来のリハビリテーションについて語り合い、市民公開トークイベントでは札幌が舞台となったドキュメンタリー「どうすればよかったか」の藤野監督をお迎えして皆で考える時間を持つことができました。

大会には支援者や家族・当事者ら様々な方々が参加され、プログラムの内容も、北海道の地域性を反映した企画に加え、様々なリハビリテーションの取り組みや研究が報告されました。大会テーマに掲げた通り、札幌の地で精神障害者リハビリテーションの未来とともに語り合うことのできた大会であったと思います。

次回の第33回京都大会は令和8年12月19日（土）～20日（日）、京都大学で開催されます。多くの皆様のご参加をお待ちしております。

<開催概要>

大会名称	日本精神障害者リハビリテーション学会第32回東京札幌大会
テーマ	「ともにつくる」を北の大地で考えるー共創社会の未来に向けてー
会期	令和7年10月25日（土）～26日（日）
開場	札幌医科大学
参加者数	628名
大会長	池田 望（札幌医科大学 保健医療学部 作業療法学科 教授）
副大会長	大川 浩子（北海道文教大学 人間科学部リハビリテーション学科 教授） 石井 貴男（札幌医科大学 保健医療学部 作業療法学科 教授） 矢部 滋也（北海道ピアサポート協会 代表理事）
実行委員長	森元 隆文（札幌医科大学 保健医療学部 作業療法学科 講師）
顧問	河西 千秋（札幌医科大学 医学部 神経精神医学講座 主任教授） 向谷地 生良（北海道医療大学 看護福祉学部 特任教授）



札幌大会関係者の皆様



➤ 研修セミナー報告

研修セミナーⅠ

コ・プロダクション（共同創造）とリカバリーカレッジ

研修委員 彼谷哲志

（特定非営利活動法人あすなる）

研修セミナー1は、学会のCo-designワーキングが担当し、リカバリーカレッジの取り組みを手がかりに、コ・プロダクション（共同創造）のあり方を考える場となりました。前半は、黒瀬勝宏さん（リカバリーカレッジKOBE）、宮本有紀さん（リカバリーカレッジおおた／東京大学）による講演でした。

座長は岩崎香さん（早稲田大学）、司会は坂本明子さん（久留米大学）と彼谷哲志（NPOあすなる）が務めました。3人は、学会のCo-designワーキングメンバーです。

宮本さん（ゆっきい）からは、「コ・プロダクションとリカバリーカレッジ」をめぐる考え方や背景について、概説的なお話がありました。コ・プロダクションとは、サービスの受け手と供給者が対等で互恵的な関係を築くことだと説明されました。患者は「消費者」ではなく、サービスをより良くするための知恵や情報を持つ「貢献者」へと位置づけが変わっていく、という指摘もありました。共同創造の場で大切なのは、安心して声を出せること、そして誰の声も大切に受け止められることだと語られました。

黒瀬さん（かっちゃん）からは、リカバリーカレッジKOBEの紹介がありました。取り組みの具体的な内容はもちろんのこと、何よりもコ・プロダクションの姿勢そのものが、言葉を通して丁寧に伝えられていたのが印象的でした。さまざまな立場や職種の人が参加し、継続して関わる人もいれば、休みながら関わる人もいるなど、仲間の「思いもいろい

ろ」です。講演では「平等」「学び合う」といった言葉がたびたび用いられ、活動の基盤となる価値観が示されました。リカバリーカレッジKOBEでは、「違っていても当たり前」という意味を込めた「ちゃうちやうでええやん」を合言葉にしているそうです。

後半はおふたりの話を受けて、会場参加者同士によるグループワークを実施しました。会場の各所で活発な話し声が響き、意見交換は盛況。続く質疑応答も時間が足りないほどで、関心の高さが伺えた研修でした。

研修セミナーⅡ

ともに創る、ピアサポートストーリー

大会実行委員 小笠原啓人

（北海道ピアサポート協会理事）

研修セミナーⅡはやべっち、おがちゃん、のんちゃん、むーちゃんで開催しました。思っていた以上に参加いただき、盛況でした。

研修では、話題提供としてやべっちより「ピアサポートストーリー」の説明があり、その後、おがちゃん、のんちゃん、むーちゃん、それぞれがピアサポートストーリーを発表、ピアサポートの感覚についても触れながら話をしました。また、演習として「仲間（ピア）探し体験」を、グループ分けしてピアサポートを感じていただく機会を持ちました。

ピアサポートストーリーとは何なのかと疑問に思われる方もいるかもしれません。言わばその人それぞれのピアサポートの経験談です。大学受験に失敗した、学校に馴染めない、離婚経験があるなど、生きていくと誰しもが困難な経験にぶつかることがあります。そんな時に自分を奮い立たせてくれるのは人



との「出会い」であり、「仲間（ピア）」。「自分一人ではどうあがいても解決できない中で出会うピアの存在に救われてきた、そして今もお救われていることを忘れないようにしたい。自分の中にあるモヤが晴れていく、そしてホッとする感覚。自己開示を避けて生きてきた私にとってこのセミナーそのものがピアサポートになりました。自分の話に耳を傾ける人がいる、それだけで励みになります。だからこそ私も誰かの話に耳を傾ける人でありたい。これがきっとピアサポートの感覚なのだと思います。場を一緒に囲んでくれた皆さん、ありがとうございました。

研修セミナーⅢ

「ひきこもり経験を有するピアスタッフによる多機能型若者実践活動研究
—在宅活動・居場所活動・社会参画活動に着目して—

研修委員 船越明子（神戸市看護大学）

研修企画では、札幌市を中心に長年ひきこもり支援を行ってきた特定非営利活動法人レター・ポスト・フレンド相談ネットワークの理事長 田中敦さんによる講演を実施しました。レター・ポスト・フレンド相談ネットワークでは昔ながらの絵葉書からメタバースまで多様な媒体を用い、企業やピアスタッフを活用して幅広い支援を行っておられます。

ご講演では、ピア・アウトリーチ活動を2002年に開始されてから現在に至るまでに蓄積されたピア活動の理念やノウハウが惜しみなく紹介されました。在宅活動（絵葉書送付や会報発行）、居場所活動（当事者会の運営）、社会参画活動（中間労働、ショートタイムワーク）の3つをピアサポート活動のパラダイムとし、行政機関のバックアップを受けて当事者と専門職の知識を融合させて新たな

実践的知識を生み出す協働のあり方は、ひきこもり支援に留まらずリハビリテーションの対象となる全ての人々の参考になると思いました。

田中さんは、ピアサポート活動の中で双方無理のない緩やかなつながりを意識されていました。こうした緩やかなつながりを継続させることは、ピアサポート活動に求められる大切な役割の一つだと思います。ご参加下さった皆様、ありがとうございました。

研修セミナーⅣ

精神科リハビリテーション領域における研究活動への取り組み方を考える

研究実践委員会 佐藤さやか

（国立精神・神経医療研究センター）

本セミナーは2018年度から定期的に開催してきた「研究法入門セミナー」の成果と課題を踏まえて、今後の本学会からの「研究」に関する情報発信の方向性について考えるために企画しました。

冒頭に「研究法入門セミナー」の立ち上げや運営に関わってこられた安西理事より、本学会創設以降の研究に関する情報発信や実践と研究が連携してお互いのレベルアップにつながる研究のあり方、研究表彰としての野中賞創設の経緯、2017年の拡大理事会以降の取り組みが共有されました。次に松田委員より「研究法入門セミナー」の成果を踏まえて、当事者/家族、実践家、研究者のネットワークづくり、若手研究者の育成、理事や委員以外の研究者の学会活動への参加促進など将来に向けた提案がありました。松長委員からは看護領域からキャリア形成の一部として研究活動が業務の中に組み込まれている現状が報告され、エビデンスに基づく実践（Evidence based practice: EBP）において先行研究を批



判的に読めることは実践への活用、臨床研究の実施のどちらにも必要であるが、EBPと「自分が臨床研究に取り組むこと」はイコールではなく、それぞれに異なる支援が必要ではないか、という問題提起がありました。小野理事からは地域で就労支援、若者支援を実践する立場から NPO 法人が EBP や臨床研究について知ること、知識を活用することで行政へのプロポーザルにも有益であった事例について紹介がありました。実際に申請に使われた仕様書などを交えて大変具体的な説明があり、会場からは強い関心が寄せられました。最後に指定討論として千葉理事から「精神障害とリハビリテーション」誌の投稿、査

読体制の刷新について紹介があり、今後どのような実践紹介や研究論文を求めているかについて提案がありました。

当日の参加者は多くはありませんでしたが、各発表に対して質問者ご自身の現在の「研究」へのニーズを踏まえた密度の濃い質問があり、質疑応答は参加者/登壇者双方に実り多い時間になったのではないかと思います。

次回の京都大会では「研究」についてざっくりばらんに現在の困りごとや知りたいことを相談、議論できるようなワークショップ形式にすることも一案ではないかと構想しているところです。少しでも EBP や臨床研究に興味があるという方はぜひご参加を検討ください。

02 / IPPO 賞受賞者紹介

実践賞委員会委員長 千葉 理恵

2025 年度 IPPO 賞受賞機関の選考

精神保健医療福祉の分野で優れた支援を実践している機関・団体を表彰する IPPO 賞 (Interactive Person-centered Practice and Organization : 双方向性かつ当事者中心の実践・機関) は、この分野で新たな一歩 (IPPO) をふみ出すような支援をしている機関・団体に光をあてて表彰しています。2025 年度は、4 回目となる IPPO 賞の選考・表彰となりました。2025 年度の選考は、各応募機関からの申請書類の内容に基づき、ノミネートされた 4 機関を対象として IPPO 賞の 10 基準に照らして厳正に行われ、理事会において「一般社団法人 Q-ACT」および「東京大学医学系研究科医学のダイバーシティ教育研究センター」の 2 つの機関の受賞が決定いたしました。※写真は受賞式での様子です。

一般社団法人 Q-ACT のご紹介



一般社団法人 Q-ACT は、2012 年に福岡県内初の ACT チームとして活動を開始し、これまでのべ約 500 人の重症精神障害者のリカバリ

ーを支援してこられました。どこに住んでいても ACT の支援が受けられる地域になることを目指し、福岡県内 4 カ所に ACT チームを立上げ、さらに 2025 年 4 月には 5 チーム目を立ち上げ、県内の半分のエリアをカバーしています。ピアスタッフの雇用やピアスタッフとの協働、就労支援、家族支援にも力を入れています。

一般社団法人 Q-ACT の活動として特に高く評価されたのは、支援が届きにくい重度精神疾患をもつ人を対象として、アウトリーチによる支援を精力的に発展させている点や、ピアスタッフを含めた組織作りをビジネスモデルにしている点などでした。今後、こうした支援が全国でさらに広がっていくようなモデルになる可能性を秘めた実践であると評価されました。

東京大学医学系研究科医学のダイバーシティ教育研究センターのご紹介



東京大学医学系研究科医学のダイバーシティ教育研究センターが行う複数の教育プログラムの中の一つである「精神領域ピアサポートワーカ

ー育成コース (TICPOC_D-1 コース)」では、精神領域のピア人材を先駆的に育成しており、1年間のコース期間を通して、実習や多職種との学びあい、経験豊かなピアサポートワーカーからのスーパービジョン等のプログラムを提供しています。2025年時点ですでに10名がこのプログラムを修了し、ピアサポートワーカーとして活躍されています。

専門職者とピアとパートナーシップを重視している点が時代のニーズに合っていることや、体系化されたプログラムを継続して提供していること、ピア人材の育成やピアによるその後の支援などについてこれから多くのエビデンスがうまれることが期待できることなどが特に高く評価され、大変独創的で、高い価値と可能性をもつ実践であると支持されました。

一般社団法人 Q-ACT、ならびに東京大学医学系研究科医学のダイバーシティ教育研究センターの活動の詳細については、学会誌「精神障害とリハビリテーション」Vol. 30、No.1 (2026年6月頃発行予定)でも紹介される予定です。ぜひご覧ください。また、学会ホームページには、上記の受賞機関ならびに、ノミネートされた「ともころのクリニック」と「わかば作業所」の問い合わせ先を掲載しています。
(<https://japr.jp/lecture/bestpractice/>)

➤ 2026年度 IPPO 賞募集のお知らせ

2026年度は2025年度に引き続き、2月1日～7月15日が募集期間となります。長年の実績がある機関・団体だけでなく、よりよいサービスの発展につながるような新しい実践や、キラリと光る先鋭的な実践をしている機関・団体も選考の対象になります。ノミネート機関・受賞機関は、学会ホームページで紹介され多くの人に知ってもらえる機会になり、さらに受賞機関は、年次大会や学会誌で実践について紹介することができます。支援者や支援を受けている人がそうした実践を知るとは、よりよい支援がさらに広がる IPPO となっていくかもしれません。様々な形で支援に取り組んでいらっしゃる皆様、ぜひ IPPO ふみ出し、応募して取り組みを紹介してみませんか。半年間以上日本精神障害者リハビリテーションの会員の方が1名以上いらっしゃる機関・団体であればご応募いただけますので、多くの自薦・他薦をお待ちしています。応募に関する詳細については、学会ホームページをご覧ください

(<https://japr.jp/lecture/bestpractice/>)。



03 / 第33回京都大会のご案内

大会長 千葉 理恵

(京都大学大学院 医学研究科 人間健康科学系専攻 精神保健看護学分野)

このたび、日本精神障害者リハビリテーション学会第33回京都大会を2026年12月19日(土)・20日(日)の両日に京都大学で開催させていただくこととなりました。会場での参加者同士のつながりや知識・経験の共有、そして地域の人々との協働を通して、これからの精神科リハビリテーションの輪を広げていくという思いを込めて、本大会のテーマを「語り合い、つながり合い、ともに生きるーリカバリーの新しい風を京都からー」としました。これまでの年次大会に続いて京都大会も、この分野の新たな可能性を皆様とともに探究し、考えていける大会にしていきたいと思っています。

大会長企画としては、Edilma Yearwood 先生 (Georgetown 大学) をお招きして、精神科リハビリテーション分野における多様性・公平性・包括性についてご講演いただく予定です。さらに、京都大会副大会長の村井俊哉先生 (京都大学)、京都大会顧問の山下俊幸先生 (洛南病院) による教育講演をはじめ、よりよい支援・サービスの実現に向けて、多くの職種・立場の視点から議論を深めるシンポジウムや、新たな知見を学ぶことのできる研修セミナーなど、多彩なプログラムを企画しています。一般演題・自主企画の演題登録

は、5月頃から開始する予定です。本大会では一般演題の優秀演題賞の選考・表彰も行いますので、皆様どうぞふるってご登録ください。

本大会では、学生の皆様にも気軽にご参加いただけるように、参加登録区分として「学生(大学院生を除く)」を設けることにしました。また、開会式ではコーラスを計画しています。ぜひ皆にも一緒に口ずさみ、盛り上げていただいて、思い出に残る大会にできたらと思っています。最新情報は、今後順次ホームページに掲載していきますので、SNSと合わせて時々チェックしてみてください

(<https://www.c-linkage.co.jp/japr33/>)。

静寂に包まれた、冬ならではの美しい景色を見ることのできる12月の京都で、皆様と語り合い、つながり合えることを楽しみに、企画委員会一同、皆様のご参加を心よりお待ちしております。京都周辺の宿泊施設は、時期が近づくとも予約しにくくなる可能性がありますので、お早目のご予約をおすすめいたします。



04 / 理事自己紹介 Part.2

前号に引き続き、理事自己紹介をお届けいたします。皆様、前回の理事自己紹介 Part.1 はお読みいただけただでしょうか？今回の Part2 も前号に引き続き、とても興味深い内容となっていますので、ぜひ最後までお目通しください。そして、興味を持たれた方で、前号をご覧になっていない方はぜひ、ご覧ください。学会ホームページからいつでも見て

いただくことができます。前回と引き続き以下のテーマで執筆のご依頼をいたしました。
(広報委員吉見)

- ① 職種、資格、立場など
- ② 委員会やワーキンググループでの役割
- ③ 学会関連以外で行っている活動
- ④ 休日何をしているか。



副会長 岩崎 香

①精神保健福祉、社会福祉士 相談支援専門員

②編集委員会と Co-design プロジェクトを担当して

います。理事にさせていただいてから長い月日が経過したような気がします。当初は広報を担当していましたが、そこから事務局（総務を兼務していた時期もあり）をやらせていただいていた。事務局を吉田先生に引き継いでからは、いろんな委員会をお手伝いさせていただいている状況です。一昨年、Co-design プロジェクトを立ち上げ、学会への当事者参画などを考えている今日この頃です。

③普段は早稲田大学で社会福祉士の養成に携わっていますが、社会福祉法人豊芯会（東京都豊島区）を主なフィールドとして実践も行って、主に相談支援専門員としての仕事と、就労継続 A 型での調理の仕事をしています。最近一生懸命やっているのは、障害当事者の方とその経験を活かして障害福祉サービス事業所で働くことを支援する活動です。障害者ピアサポート研修事業の各都道府県等での展開やピアサポートそのものが拡がることを願って活動しています。

④休日は犬や孫と戯れたり、海外ドラマを見たり、昼寝したり…何をしているかと言われてもとりとめもないようなことばかりで…流行りの推し活をする元気もなく、気が付いたらまた、仕事に追われているというようなそんな感じ





事務局長 池田 望

①作業療法士として札幌の民間医療機関で勤務した後、縁あって母校に戻り精神障害リハビリテーションの教育研究に携わっています。

②2025年度から事務局長・総務企画委員

を拝命しました。理事会や総会資料の取りまとめ、各種手続き等の学会事務を皆様のサポ

ートをいただきながら行っております。

③教育研究や附属病院 OT 臨床のマネジメントといった大学業務のほか、主に精神障害者の就労支援を行う NPO や北海道若年認知症の人と家族の会の役員をしており、地域での障害者支援にも興味を持って活動しています。

④猫と戯れております。最近は「シャーツ」と威嚇されなくなり、ありがたいと感じております。大学時代の軽音メンバーと音楽イベントに参加することも稀にあります。

大会委員委員長 樽谷 精一郎 (たるたに せいいちろう)

①職種：医師、資格：精神保健指定医、医学博士、簿記三級、立場：大阪精神医学研究所新阿武山病院副院長

②大会委員会や統合失調症診療ガイドライン担当委員としてお手伝いをさせてもらっています。大会委員会では委員長として、学術大会の依頼や開催支援、シンポジウムの企画などを行っています。学術大会が成功するために微力ながら裏方として活動しています。ガイドラインについては、日本精神神経学会主導の統合失調症診療ガイドライン作成に向け、統括委員の一員としてお手伝いをしております。この国の診療水準が少しでも高くなることを目指し、こちらも微力ながら末席からお手伝いが続けられたらと頑張っています。

③主に臨床に従事しておりますが、統合失調症の薬物療法に関するガイドラインの作成や、診療全体にかかるガイドラインの作成に



携わらせて頂いています。あとは細々と心理教育や認知行動療法の指導を行いつつ、院内で『慢性期病棟から病院を楽しくする会』を定期開催しつつ、慢性期病棟の職員の意欲と動機を高められたらと活動しています。

④段々と妻も子供たちも相手にしてくれなくなってきたので、休日は珈琲を焙煎してみたり、ジムに行ってみたり、面白い料理を作ったりします。元気がある時には、あまり大衆受けしないような単館系の映画を観に行ったり、本屋さんやワイン屋さんを徘徊したりしています。最近の流行は、人が勧めてくれたものに挑戦することです。

学会誌編集委員委員長 山口 創生



①精神保健福祉士ですが、研究職としてのキャリアを歩んできました。

②現在は、編集委員会と実践賞委員会のメンバーとして活動しています。編集委員会では、多くの方に関心を持っていただけるように、他の委員と協力しながら特集案などを考えております。

また、多くの方に投稿していただけるように投稿規定や投稿方法の改訂に取り組んでいます。

③普段は研究所の職員として、地域精神保健に関する様々なテーマについての調査や活動に取り組んでいます。例えば、就労支援やアウトリーチ支援、ケースマネジメントなどについて調査をすることがしばしばあります。また、最近では、当事者と研究者がどのように共同するかについても関心を持っています。

④休日何をしているか。

休日は、家族と一緒に過ごすことが多いです。買い物に行ったり、公園に行ったり、あるいはネコとモフモフしたりしています。もともとスポーツや漫画を読むことが大好きなので、年に数回野球の試合に参加したり、年に1回ネットカフェに入り浸ったりすることがあります。

実践賞委員会委員長 千葉 理恵

①職種は看護師・保健師で、現在は大学で精神保健看護学分野の教員をしています。

②実践賞委員会では、委員会のメンバーと一緒にIPPO賞の募集や選考を行っています。編集委員会では、学会誌「精神障害とリハビリテーション」の編集や、投稿規定・投稿システムの見直しなどに携わっています。

③大学では、学部や大学院で精神保健看護学に関する教育を担当しています。また、精神疾患をもつ人のリハビリ支援や家族への支援などについての研究を行っています。最近は、少子化の中で大学でのよりよい看護教育をどのように運営していくかや、精神看護の分野での診療報酬改定に向けた検討など、いろいろな会議に出席する機会が多く、視野が広がる日々を

過ごしています。

④その一方で行動範囲は狭く、近所のスーパーに行ってカートを押すことが至福の喜びです。冬の時期は、音楽を聴きながらこたつに入っていることが多いです。



大川 浩子



①職種は作業療法士で、資格としては他に、精神保健福祉士、公認心理師の国家資格と、最近では健康経営エキスパートアドバイザーを取得しました。立場としては実践

家寄りの研究者です。

②本学会では、実践賞委員会、研修委員会に所属しております。実践賞委員会では IPPO 賞の選考等に携わり、研修委員会では大会で実施される研修セミナーの開催にかかわっています。いずれの委員会も理事1・2期目を通じて委員をしています。また、理事になる前は、研究実践委員会と野中賞選考委員会で

も活動していました。

③普段は大学で作業療法士の養成を行っています。職業リハビリテーションに関心があり、就労支援について研究・実践にも取り組んでいます。最近では就労支援機関の管理者を対象とした研究が多いです。

④コロナ禍の真ただ中に現在の自宅に引っ越しをして以来、自宅で過ごすことに少しこだわることになりました(以前は外に出ていることが多かったです)。そのため、家事をしていることが多いです。また、NPO 法人に所属しているので、その仲間とイベントの開催や、フィールドワークに出かけることもあります。

副学会長 後藤 雅博 (ごとうまさひろ)



①精神科医師、精神科専門医・指導医、日医認定産業医。現在は社会医療法人崇徳会の多機能型精神科クリニック「こころのクリニック ウィズ」院長として臨床に従事しています。

②学会で活動としては前期から引き続き副学会長を拝命しています。1994年精神科リハビリテーション研究会として本会の発足以来、主として研修委員会、大会担当などをしてきました。現在は大会委員会に所属しており、副学会長として総務・企画のお手伝いをしています。

③当学会以外に日本心理教育・家族教室ネットワーク代表幹事、家族療法学会理事、COMHB(精神保健福祉機構)理事、社会精神医学会評議委員、統合失調症学会評議委員などを務めています。SST普及協会も発足時から運営委員、理事を務めていましたが、今年度で引退し、また精神神経学会では長く多職種協働委員会委員でしたがこれも今年引退しました。家族支援、地域精神医療、心理社会的リハビリテーションが専門領域といえるでしょうか。

④60歳を過ぎてからピアノを習い始め、なかなかうまくありませんが、小さな子たちと混じって発表会にも出ています。映画が好きで、家族療法学会の機関誌に「映画に見る家族」を連載していますが、現在録画した洋画、7500タイトル超、邦画は3500タイトル超に上っており、死ぬまでに全部見られないのではないかという危惧があります。

市来 真彦



①東京医科大学にて学生・職員健康サポートセンターセンター長、統括産業医、メンタル校医として全学生、全職員の健康管理（一次予防、二次予防、三次予防）に従事している他、精神科医として診

療に携わっています。

②実践賞委員会、大会委員会

③精神医学の修行をはじめて最初の十年は、社会精神医学を志す中で精神科リハビリテーションに目覚め、三つの精神科病院で長期入院患者さんの退院支援に取り組み、仲間のスタッフ達と力を合わせ六年間に百人超の患者さんたちの退院に向けたリハビリテーション

と地域生活支援に励んでまいりました。この活動は論文化しませんでしたでしたが今のすべての活動の礎となっています。次の十年は大学で主に学生、研修医、精神科若手に対する医学教育を通してスティグマの軽減に関する啓発を行ないました。この活動でベストティーチャー賞を重ねて殿堂入りしました。そして後半の十年は産業精神保健に活動の場を移し、①に務める傍ら障害者雇用の新規開拓と就労継続の支援という職業リハビリテーションを切り口にした診療を実践しております。

④ミュージカル俳優の「つぶら瞳」は東日本大震災直前から休演中、歌手の「ジョージ西郷」は還暦での紅白初出場に失敗、仮装大賞は毎年エントリー忘れ、それもこれも休日がないことが大きな原因です。理事を退任したら実行しようと目論んでおります（笑）

研修委員会委員長 坂本 明子



① 精神保健福祉士、ALF（認定アドバンスレベル WRAP ファシリテーター）、CPMCT（認定パーソナル・メディスン・コーチングトレーナー）

② 研修委員、Co-design ワーキンググループを担当しています。本学会は多職種、多様なお立場の方がいらっしゃるのが魅力だと思っています。皆様と共に学ぶ機会が有意義になればと、大会で研修セミナーを企画、実施しております。

③ これまで久留米大学で教員をしておりましたが、この春卒業します！それ以外の活動としては、リカバリーカレッジふくおか、WRAP、パーソナル・メディスンを実践しています。2025年に、WRAP ファシリテーター及びパーソナル・メディスン・コーチの認定研修ができる資格をなんとか取得しました。拠り所となる教材が全て英語なので、悪戦苦闘しています。言語の障壁を乗り越え AI の（私ではなく）進歩を待ち望んでいます。

④ コロナ禍でお迎えした犬を溺愛する日々です。ワンコファースト派です。休日は一緒にお昼寝をしたり、散歩したりして過ごしています。あとは、仕事や活動のない隙間を常に探して、ここぞとばかりに海外弾丸旅行を楽しんでいます！





研究・実践委員会委員長 佐藤 さやか

①公認心理師、臨床心理士、精神保健福祉士の資格を持っています。
②研究・実践委員会の委員長を担当しています。学会員のみなさんにとって臨床研究が身近で役立つものと感じて頂けるような活動を委員のみなさんと協力して行っていきたいと思っています。
③普段は国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所というメンタルヘルスや精神保健を専門とした国の研究所で、地域精神保健

に関する臨床研究に関わっています。所属している部では国の制度設計に役立てるためのアンケート調査や地域で認知行動療法などの心理学的支援を活用するための介入研究を行っています。

④食べるのが好きなので、自分で料理をしたり、インスタグラムで見つけたおいしそうなおはんやさんに友人と行ったたりして楽しんでいます。最近はいろいろな料理家さんのYouTubeチャンネルを見るのにはまっています。特に唐揚げレシピの動画を見るのが好きです^^お勧めの唐揚げレシピがあったらぜひ教えてください♪

≫ **編集後記**

新たに広報委員になりました大原さやかです。統合失調症当事者、かつて支援者（精神保健福祉士）、現在大学教員です。当事者としては26年目で、身体拘束や第1世代抗精神薬服用など経験済みです。支援者としては現場を8年経験しました。常勤の大学教員としては2年目です。人生の半分以上精神保健分野に携わっておりますが、精リハ学会の広報委員としてリカバリーを目指すリハビリテーションを普及させていくお手伝いをしたいと思います。（広報委員：大原さやか）

このたび広報委員を拝命いたしました。精神障害リハビリテーションの普及啓発に努めてまいります。諸先輩方が積み重ねてこられた実践と知見に学びつつ、日々の工夫が共有される場になるよう、広報の面から支えてまいります。学会を通じた新しい出会いを楽しみにしております。どうぞよろしく願いいたします。（広報委員：中村泰久）

News Letter

VOL.67

2026年02月発行

日本精神障害者リハビリテーション学会

【事務局】

〒060-8556 北海道札幌市中央区南1条西17丁目

札幌医科大学 保健医療学部 作業療法学第二講座 池田研究室

<https://japr.jp> Mail : japr.jimukyoku@gmail.com